

□最近の活動状況

【第16回朝食懇談会】

— 9月27日(水) ホテル辰巳屋 —

講師 公立大学法人福島県立医科大学
副理事長 谷川 攻一 氏テーマ ふくしま国際医療科学センター
～福島復興を健康の面から支える～
参加会員数 51名

講師 谷川攻一 氏

2016年12月に本格稼働しました「ふくしま国際医療科学センター」は4つの建物に分かれています。

その中でも重要な役割を果たしている「ふくしまのちと未来のメディカルセンター棟」は、「健康の見守り」と「高度医療の提供」を行っています。

県民健康管理センターでは、福島県から委託されて県民健康調査を実施しています。約200万人を対象にした基本調査の他、甲状腺検査や健康診査などの詳細調査があり定期的に報告しています。この調査は、原発事故による県民の被ばく線量の評価を行うとともに県民の健康状態を把握し健康の維持・増進を図ることを目的に実施しています。ただし、この結果を疫学的に解析し発表することが最終的な目標ではなく、あくまでも県民の「健康の見守り」がメインとなっていることをご理解ください。

先端診療部門としては、県内唯一の高度救命救急センターがあり、そして災害医療を行える態勢も整備されています。もう一つの特徴として母子とこどもの医療部門です。安心して子どもを産み育てられる環境の充実が図られたことにより、若い世代の方が福島県に来てくれると期待しています。

しかし、そこで問題となるのが医師数です。福島県の医師数は47都道府県の中でも下位にあり、特に産科医と小児科医が不足しています。県内外から医学生や医師が集い福島県に定着することを目指して、県外から各専門分野トップレベルの指導医を招へいし若い先生方の育成や、魅力的な研修体制を構築しています。

先端臨床研究センターは、最先端の医療機器による画像診断により早期診断を実施するための拠点です。中でもPET/MRIはがんなどの病気をより正確に診断できる装置です。また、新しい放射性物質を作るサイク

ロトロンという機械を用いて、がん治療に使うアスタチンというα線を出す放射性物質を生成することに成功しました。このアスタチンを含んだ薬剤を体内に投与しがん細胞に直接放射線を照射する治療法の確立を目指しています。

災害医学・医療産業棟の中にあるトランスレーショナルリサーチセンターでは、「医療」と「産業」の双方の橋渡しに主眼を置いており、様々なニーズに耳を傾け各専門分野が連携することにより、医薬品開発の支援や医療の質向上につなげていく取り組みをしています。具体的には、臨床検体を活用して「福島コレクション」と呼ばれる「①情報に変える、②加工して増やす、③ごく微量サンプルの解析技術を開発する」を創出し製薬企業や検査・診断薬企業による創薬や薬剤評価に貢献しています。

私共は、福島の力強い復興に向けた医療の拠点となる「ふくしま国際医療科学センター」を設立しました。このセンターは、東日本大震災、福島原発事故の経験を経て、それを糧として次のステップにつなげる大きな役割を担っています。新たな未来の開拓のため、整備されたこれらの施設を駆使して最大限の成果を上げること全力を尽くしてまいります。(文責：事務局)



会場風景

【第17回朝食懇談会】

— 11月1日(水)ザ・セレクトン福島 —

講師 将平鍛刀場

刀匠 藤安 将平 氏

テーマ 鎌倉期の古刀再現を目指して

— 日本刀の本質とは —

参加会員数 43名

今日は刀を二本持参しました。上段は約10年前に作ったもの、下段は27歳の時の第一作。師匠に言われた通り、師匠を真似て作ったものです。当時の師匠は人間国宝でしたので、匹敵するレベルの刀を作る天才刀工が現れたと周りは驚いたようですが、実は「刀とは何か？」わかっていなかった頃の刀です。今見ても恥ずかしいほど傷・欠点がない美しいだけの刀です。

そもそも刀は戦の現場で使う武器でした。大東亜戦争に敗れた日本は武装解除として様々な武器が取り上げられ日本刀もなくなる運命でしたが、「日本刀は美術品」であるという隠れ蓑を着たことで、我々は今、刀を作ることができます。しかし、その隠れ蓑がいつの間にか本質にすり替わり、古名刀の本質さえも見失ってしまった。

先人は、刀の地肌や刃文を見て丈夫さや切れ味の良し悪しを見極める目を持っていたはずで、それが本来の鑑定ですが、今は「地肌が美しい、傷・欠点がない、刃文が美しい＝高く売れる」ことが鑑定の基本になっています。美術品として刀を評価するようになったことで、古名刀のような美しい刀が求められ、鑑定する側が技術者である鍛冶屋を指導するようになり、実戦では役に立たないであろう「現代刀の復元」に至っている。

日本には刀剣類の国宝が約120点あり、このうち9割が鎌倉時代のものです。南北朝時代を境に国宝は一本もないことから「鎌倉期を頂点として刀工の技術が失われ名刀が現れなくなった」というのが刀剣界の常識です。ところが、先ほど言ったように刀は武器です。時代とともに刀は形を変え過去の物を超える刀を作らなければ戦国時代において生き残ることはできなかつたはずですが。そのため武士たちは、刀鍛冶にもっと優れた刀を作るよう要求してきた。結果、刀鍛冶は技術を磨き丈夫で折れない刀を作り出し進歩してきた。その頂点が室町から戦国時代であり、日本刀の表面にはそ



右 講師 藤安将平氏

下 持参された刀



の進歩の跡が見て取れます。ところが国宝の審査基準では、この技術は全く評価されず、美しいか、傷がないかだけ。国宝審議会はこの基準で刀を審査し鎌倉時代のものを宝物としたため、現代の刀鍛冶が勘違いした大きな原因がここにあります。

日本は、刃物だらけ刀だらけという環境の中で素晴らしい技術を構築してきた国です。戦後、日本人の優秀さはどこから来るのか連合軍は徹底的に研究しました。戦時中、日本人は戦闘機に乗るときも、軍艦に乗るときも刀を下げていました。実際には何の役にも立たなかつたと思いますが、それは日本人の国を守ろうとする精神を支える大きな力になっていました。今、日本刀の本質が忘れ去られようとしています。日本刀をもっともつと見直さなければいけないと思います。日本中には約300万本の刀があります。一振一振手入れをしていかないと刀は錆びて朽ちて無くなってしまいます。刀を残していくことは当然ですが、刀というものが日本人にとって、精神的にもとても大事であるという思いを次の世代に伝えていく責任が私にはあると思っています。

(文責：事務局)

【全国経済同友会代表幹事円卓会議】

— 12月4日(月)熊本市 熊本ホテルキャッスル —

今回の円卓会議は熊本市で開催され全国から約120名が参加し、当会からは阿部代表幹事が出席しました。

始めに、全国経済同友会セミナーの決算報告及び今後の開催地の報告がありました。

その後、五百旗頭真・熊本県立大学理事長が熊本地震からの復興に向けた取り組みについて講演しました。



会議風景

□今後の予定

【新年懇談会】 日 時：平成30年1月24日(水)午後4時～
 会 場：ザ・セレクトン福島
 講 師：東京電力ホールディングス株式会社 福島復興本社代表 大倉 誠 氏

【第18回朝食懇談会】(詳細決まり次第ご案内申し上げます)
 日 時：平成30年2月1日(木)午前7時50分～
 会 場：ホテル辰巳屋
 講 師：株式会社社会津ラボ 代表取締役社長 久田 雅之 氏

【第19回朝食懇談会】(詳細決まり次第ご案内申し上げます)
 日 時：平成30年3月7日(水)午前7時50分～
 会 場：ホテル辰巳屋
 講 師：福島市史編纂室 柴田 俊彰 氏

□事務局だより

○平成 29 年 9 月 から 12 月 に入会・変更のありました会員を紹介します。(敬称略)

新規入会		平成29年9月入会 やまぐち てつゆき 山口 哲行 福島県南酒販(株) 代表取締役社長		平成29年9月入会 あべ やすひろ 阿部 泰博 (株)あべき 代表取締役
	会員交代			平成29年9月交代 はらさわ じろう 原澤 二郎 ザ・セレクトン福島 執行役員総支配人

編集日誌

◇わが子が通う小学校では「地元学フィールドワーク」という行事があります。地元ガイドの案内の下、自分たちが住む地域の歴史を学び、地域の良さに触れることが目的です。将来、国内外に飛び立っていく生徒たちが、生まれ育った「ふるさと」に誇りを持ち、自信を持って「ふるさと」を紹介できるようにという先生方の思いも込められています。

◇親も参加可能で毎年子どもと一緒に町内を歩いていますが、普段、通り慣れている道でもたくさんの「新発見」や「再発見」に出会うことができます。

◇「ふくしま」の良さを発信するためにも、今年は県内各地へ足を運び「ふくしま」をもっと学びたいと思います。(今野)

□会員企業紹介 【第17回 福島民友新聞株式会社】

今回は当会の副代表幹事を務めていただいている、福島民友新聞株式会社の五阿弥社長にインタビューしました。地元紙としての役割や今後の展望など様々なお話を伺うことができました。

○「地域とともに、地域のために」

福島民友新聞社の社名には「県民の友」でありたいとの願いが込められています。新聞には、社会に問題を提起し、第三者的立場で客観的に報道していく役割があります。しかし民友はそこからもう



五阿弥宏安 代表取締役社長

一步踏み込みたい。私たちは地域に課題を提起するだけでなく、住民とともに汗を流し、一緒に解決を目指す「課題解決型」の地元紙でありたいと考えています。

福島県が直面しているもっとも大きな課題といえば、東日本大震災、原発事故からの復興再生です。私たちは「復興の道標」という長期連載の中で、国や東電に様々な注文をつけ、批判もしてきました。震災から7年近く経過したいま、しっかりと前を見て歩んでいる人も数多くいます。大切なことは県民の「自立」と「自律」です。賠償に頼らず、自立した地域経済をどう構築していくかを考えることは地元紙の役割です。賠償金の負の側面なども含め、書きにくいこともきちんと書く勇気を持ち、県民に2つの「ジリツ」を求め、支援していきます。

未曾有の大災害に見舞われましたが、巨額な復興予算が流入しているのも事実です。さまざまな助成制度もあります。「ピンチはチャンス」とよく言われますが、チャンスをどう活かしていくのか。暗い面だけではなく、前にある希望の光を示さなければなりません。それに向かって社員一丸となって取り組んでいきます。

○人材育成・社員教育について

新聞社の社員である以前に「良き社会人たれ」と言っています。あいさつと身だしなみは社会人の基本。誠意を尽くし、真心をもって人と接するよう指導しています。

新聞社は人材が全て。一人一人の能力を高めていくことが極めて重要です。その意味でも専門知識や専門技術習得のための研修をさらに強化していく必要があります。一方で、社員には「失敗」も奨励しています。世の中は大きく変化しています。会社も社員も時代とともに変わり続けなければなりません。そこにはリスクが伴います。しかし、変わるリスクより、変わらないリスクの方が大きいのが今の時代です。「前向きな失敗なら、どん

んしなさい」と話しています。

「働き方改革」も進めています。新聞は夜間に制作するため、深夜労働になってしまいます。仕事と家庭を両立できる職場を目指し、休暇取得や残業時間の減少に取り組んでいます。社員一人一人がオンとオフの切り替えを意識し、効率的な仕事の進め方を実践するよう、各部署で努力しています。昨年4月には、男性社員の育児休業取得実績を認められ、県の「働く女性応援」企業の認証を受けました。

○歴史を見つめなおし誇りを持つ

今年、戊辰戦争から150年の節目を迎えます。天皇を守っていた会津藩は薩長によって「賊軍」とされました。薩長史観を見直し、新しい視点で維新を検証しようと昨年5月から、大型企画「維新再考」の連載をスタートさせました。当代一流の歴史家であり作家の半藤一利さん、中村彰彦さんらにも登場していただき、「敗者の側に正義はなかったか」を語ってもらっています。読者の反響も大きく、県民が郷土の歴史に理解を深めるきっかけになっていると感じています。将来を担う若者たちにふるさとの歴史を知ってもらい、自分たちが暮らす福島に「誇り」を持ってほしいという願いを込め、この企画を続けていきます。

これからも、福島の復興再生に向けて、問題点を具体的に指摘し、解決のための処方箋を提示していきます。福島にとって、なくてはならない地元紙であり続けたいと思っています。



住 所 〒960-8648
福島市柳町4-29
創 立 明治28年5月 従業員数 230名
T E L 024-523-1191 (代表)
U R L <http://www.minyu-net.com/>